

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04475

研究課題名(和文) 継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築

研究課題名(英文) Leveraging inherit a archive and peace education of the next generation

研究代表者

外池 智 (Tonoike, Satoshi)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：20323230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：まず、継承的アーカイブについては、特に広島市「被爆体験伝承者」と長崎市「家族証言者」「交流証言者」に注目し、直接秋田大学にお呼びして講話の実施を試みた。次に、「次世代の平和教育」については、特に平和教育の先駆的取り組みを続けてきた広島市、長崎市、那覇市を取り上げ、その教員研修における平和教育の位置付けや内容構成、カリキュラムや教材に注目し、調査・分析を試みた。最後に、授業実践の構築については、特に、秋田県の花岡事件を取り上げ、授業を実施した。今回は初めて小学校で実施し、また再び中学校でも実施した。

研究成果の概要(英文)：This study is a2009 from promoting war ruins study, 2012continuing research studies on the inheritance of war experience fiscal year has been pushing "talk" , in addition to 2015 Study on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving is working from the fiscal year The one to announce the end.
Talk about the experience of war and postwar 72 years has passed since World War II at the age if 10 -year-old, whose population is with total population of about 8%longer. So to speak, talk of such a direct war experience in such a situation, not by using the hierarchical archive "peace education of the next generation" and practice should call also Ever-changing and expanded.

研究分野：社会科教育学

キーワード：継承的アーカイブ 次世代の平和教育 広島「被爆大変伝承者」 長崎「家族証言者」「交流証言者」

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦場・戦争体験者の減少

親や祖父母などの身近な人たちからの「戦争」の語り伝え、すなわち「語り」による歴史(オーラルヒストリー)の伝達は、地域や家庭のいわば市井における歴史教育として戦争学習の重要な一翼を担ってきた。しかし、今日、戦後70年を迎える年月を経て、直接の戦争体験をもつ世代が年ごとに減少していくにつれ、そうした身近な人たちからの「戦争」の語り伝えは日々失われつつある。戦争の「語り部」の減少の中、今後の学校教育、とりわけ歴史教育の果たす役割はますます重要である。「ヒト」から「モノ」へ、確実に戦争の記憶や記録、痕跡が移行していく中、体験者の持つリアリティーに迫る理解・共感可能な学習をどのように展開していくのか、そのための教材をどのように開発していくのかは、これからの平和教育の大切な課題である。

(2) 「次世代の平和教育」

こうした中、もはや直接的な戦場・戦争体験者をよりどころとしない、いわば「次世代の平和教育」の実践も刻々と試みられてきた。例えば、広島市などをはじめとするそうした取り組みから、「次世代の平和教育」の特色として、以下3点を挙げたい。

継承的アーカイブの活用

直接的な戦場・戦争体験者の「語り」や体験談はもはや活用できない時代、記録媒体(DVD、証言集)や戦争遺跡、遺物などの多様な継承的アーカイブが実行されている。こうした教育資源を活用して展開されている教育実践であること。

戦後の平和希求活動への着眼

戦中の歴史的事象や史実を取り上げるだけでなく、その後今日に至るまでの70年間の平和への取り組みにも着眼し、取り上げている実践であること。戦争学習では、当然のことながら「その時」に何があったのか、その歴史的事実が取り上げられる。そうした実践は、広島や長崎の原爆投下、沖縄の国内唯一の地上戦というように、どうしても被害的側面が強調される課題があった。一方それに応えるように、花岡事件のような中国人強制連行などの加害的側面に着眼した実践が取り込まれることもあった。しかし、こうした被害・加害の二項対立的な取り扱いではなく、「いま」につながる今日までの平和希求の取り組みを取り上げている実践であること。

目的の平和教育から方法的平和教育へ

平和教育は、当然のことながら子ども達の平和への社会的実践を期待し、それを目的として実践されてきた。しかし、新しく取り組まれている「次世代の平和教育」では、例えばESDの観点や環境教育の視点、あるいはDeSeCoの提唱した「キー・コンピテンシー」や国立教育研究所の示す「21世紀型能力」の

育成等を念頭に展開されているという特色がある。すなわち、平和を目的とするいわば目的の平和教育にとどまらず、平和教育を通じて言語スキルや問題解決力、社会参画力や人間関係形成力を育成する、いわば方法的平和教育を展開している実践であること。

2. 研究の目的

本研究では、戦後70年以上の歳月が流れ、戦場・戦争体験者の減少の中、各地で進められている継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」のカリキュラムや教材、授業実践の調査・分析を批判的に検討し、その成果を踏まえて新たな教材を開発するとともに、具体的授業実践を提起する事を目的としている。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、まず平成27年度には、これまで進めて来た戦争体験「語り」の継承プログラムの研究成果を踏まえ、実践開発と連携を念頭とした広島や長崎、沖縄における戦争体験の継承的アーカイブの調査・分析を実施した。次に平成28年度には、広島市における「平和教育プログラム」をはじめとする長崎・沖縄の教育実践の調査・分析を実施した。最後に平成29年度では、こうした連携と実践の批判的検討を踏まえて、今後の有効な活用についてカリキュラム開発や教材開発、具体的授業を構築し提起していきたい。

4. 研究成果

(1) 継承的アーカイブ

特に広島市「被爆体験伝承者」と長崎市「家族証言者」「交流証言者」に注目し、直接秋田大学にお呼びして講話の実施を試みた。具体的には、一昨年度の2015(平成27)年には広島市「被爆体験伝承者」の高岡昌裕氏(講話時36歳)、昨年度の2016(平成28)年には広島市「被爆体験伝承者」の檜原泰一氏(講話時40歳)と長崎市「家族証言者」の佐藤直子氏(講話時52歳)、そして2017(平成29)年度は、広島市「被爆体験伝承者」の藤井幸恵氏(講話時73歳)と、長崎市「交流証言者」の松野世菜氏(講話時19歳)である。聴講者は、秋田大学教育文化学部の社会科学教育研究室の学生が中心である。「語り」の内容構成や方法、実際に視聴した学生達の感想などの視点から分析・検討した。

(2) 次世代の平和教育

特に平和教育の先駆的取り組みを続けてきた広島市、長崎市、那覇市を取り上げ、その教員研修における平和教育の位置付けや内容構成、カリキュラムや教材に注目し、調査・分析を試みた。平和教育実践は、個々の教員の意欲的取り組みによってなされたり、民間の教育研究会によってなされる場合など様々である。しかし、ここでは特に各自治

体による取り組みや教員研修に注目し取り上げてみた。それは、ある特別な関心の下に実施されている平和教育実践ではなく、一般的な教員を対象とした実践だからである。具体的には、まず広島市教育委員会による「平和教育プログラム」を取り上げ検討した。さらに、その研究指定校である広島市立基町小学校、広島市立川内小学校を取り上げ検討した。次に、長崎市教育委員会による「平和教育研究校の指定」校を取り上げ、実践校としては2015-2016(平成27-28)年度指定校の長崎市立山里小学校、そして2014-2015(平成26-27)年度グループ指定の長崎市立城山小学校を取り上げ検討した。最後に、こうした広島市、長崎市の取り組みを踏まえて、那覇市を中心とした沖縄の「次世代の平和教育」実践を取り上げた。具体的にはまず「平和旬間」を中心とした那覇市の代表的事例として那覇市立真嘉比小学校、次に特に「総合的な学習の時間」において地域との連携と戦争体験の「語り」を活用している事例として浦添市立港川小学校、そして、同じく特に「総合的な学習の時間」において身近な戦争遺跡を活用している事例として南風原町立南風原中学校、最後に、社会科において個別教員の積極的取り組みの事例として那覇市立石嶺小学校の下地治人氏の実践を取り上げた。

(3) 授業実践の構築

最後に、こうした先駆的試みの批判的検討を踏まえて、「次世代の平和教育」実践開発に臨み、実際に授業を実施した。具体的には、秋田県の花岡事件を題材にした授業実践である。

秋田大学教育文化学部社会科教育研究室では、2年次に「社会科巡見」を実施し、それに基づいて3年次に「社会科授業づくり演習」として、実際に附属学校園や公立校で授業を実施して来た。花岡事件については、2003(平成15)年度と2010(平成22)年度の2回「社会科巡見」を行っている。そして、最初の「社会科巡見」に基づき、2005(平成17)年3月には、既にこの花岡事件を題材に授業化し、秋田大学教育文化学部附属中学校の2年生を対象に授業を実践している。この授業は、2005(平成16)年が戦後60年を迎えた年にも当たっていたため、ABS秋田放送や秋田魁新報等、地元メディアにも大きく取り上げられた。さらに、反響が大きかったため、附属中学校以外にも田沢湖町立(現仙北市立)神代中学校でも、内容を修正し実践している。

そして、その後ほぼ10年の時を経て、2017(平成29)年7月に再びこの花岡事件を取り上げ、授業を実施した。今回は初めて小学校で実施し、また再び中学校でも実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

- ・外池智「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の展開 広島『平和教育プログラム』の実践」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第38号、(秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター、2016年) 1-12頁。査読有り。
- ・外池智「戦争体験『語り』の継承とアーカイブ(3) 広島『被爆体験伝承者』のデビュー」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第71集、(秋田大学教育文化学部、2016年) 1-22頁。査読無し。
- ・外池智「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』(2) 長崎市立山里小・城山小の実践を事例として」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第39号、(秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター、2017年) 1-13頁。査読有り。
- ・外池智「戦争体験『語り』の継承とアーカイブ(4) 長崎市『語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)』推進事業」を事例として」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第72集、(秋田大学教育文化学部、2017年) 57-91頁。査読無し。
- ・外池智「秋田の戦争遺跡」秋田県文化財団編『出羽路』60周年記念号(秋田県文化財団、2018年) 16-32頁。査読無し。

[学会発表](計3件)

- ・外池智「戦争体験『語り』の継承と「次世代の平和教育」(2) 沖縄の実践を事例として」日本社会科教育学会 第67回全国研究大会 自由研究発表(千葉大学、2017年)
- ・外池智「戦争体験『語り』の継承と「次世代の平和教育」 長崎市『語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)』推進事業」と山里小・城山小の実践」日本社会科教育学会 第66回全国研究大会 自由研究発表(弘前大学、2016年)
- ・外池智「花岡事件へのフィールドワークと歴史実践の構築」第4回東北アジア歴史認識研究会全体研究会指定報告(岩手大学、2016年)

[図書](計2件)

- ・外池智「地方自治体による教員研修」平和教育学研究会編『平和教育シリーズ 7 平和教育事典』(京都教育大学社会科研究室、2017年) 61-65頁。
- ・外池智『2015-2017年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』(八郎潟印刷、2018年) 全296頁。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

外池 智 (TONOIKE, Satoshi)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：20323230

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

渡部 豊彦 (WATANABE, Toyohiko)
伊藤紀久夫 (ITO, Kikuo)
佐藤 守 (SATO, Mamoru)
富樫 康雄 (TOGASHI, YASUO)